

Title	グレート・ブックス・プログラムと西洋中心主義： セント・ジョーンズ・カレッジのアナポリス校に焦点をあてて
Sub Title	The Great books program and Eurocentrism : focusing on St. John's College, Annapolis
Author	安藤, 真聡(Ando, Masato)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.82 (2016.) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	<p>The purpose of this paper is to examine the great books program as it contends with the concerns of Eurocentrism. St. John's College, a liberal arts college, which introduced an undergraduate great books program in 1937, will be the main focus. General education programs based on Western civilization, including great books programs, have been criticized vociferously by multiculturalists for being Eurocentric, and since the 1980s, some of them have been replaced with more multiculturalistic programs. However, despite the criticism by multiculturalists, and some changes in its reading list, St. John's College has maintained its Eurocentric undergraduate great books program.</p> <p>This paper comprises five sections : Section 1 deals with the purpose and structure of the paper ; Section 2 presents a review on previous studies concerning the history of the great books program at St. John's College ; Section 3 reveals Eva T. H. Brann's understanding of liberal education and multiculturalistic views ; she has been a faculty member since 1957 and has worked as a dean from 1990 to 1997 at St. John's College, Annapolis ; Section 4 scrutinizes how Brann defended the great books program so as to avoid criticism by the multiculturalists in the early 1990s ; On the basis of the four sections described above, Section 5 presents concluding remarks on the program.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000082-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グレイト・ブックス・プログラムと西洋中心主義

——セント・ジョーンズ・カレッジのアナポリス校に焦点をあてて——

The Great Books Program and Eurocentrism:

Focusing on St. John's College, Annapolis

安 藤 真 聡*

Masato Ando

The purpose of this paper is to examine the great books program as it contends with the concerns of Eurocentrism. St. John's College, a liberal arts college, which introduced an undergraduate great books program in 1937, will be the main focus.

General education programs based on Western civilization, including great books programs, have been criticized vociferously by multiculturalists for being Eurocentric, and since the 1980s, some of them have been replaced with more multiculturalistic programs. However, despite the criticism by multiculturalists, and some changes in its reading list, St. John's College has maintained its Eurocentric undergraduate great books program.

This paper comprises five sections: Section 1 deals with the purpose and structure of the paper; Section 2 presents a review on previous studies concerning the history of the great books program at St. John's College; Section 3 reveals Eva T. H. Brann's understanding of liberal education and multiculturalistic views; she has been a faculty member since 1957 and has worked as a dean from 1990 to 1997 at St. John's College, Annapolis; Section 4 scrutinizes how Brann defended the great books program so as to avoid criticism by the multiculturalists in the early 1990s; On the basis of the four sections described above, Section 5 presents concluding remarks on the program.

Key words: great books, St. John's College, liberal education, Eurocentrism, Eva T. H. Brann

キーワード: グレイト・ブックス, セント・ジョーンズ・カレッジ, リベラル・エデュケーション, 西洋中心主義, エヴァ・T・H・ブラン

* 慶應義塾大学教職課程センター

1. はじめに——本論文の目的及び構成

本稿は、今日においてもなお、西洋中心主義的な学士課程教育を堅持し続けているセント・ジョーンズ・カレッジのアナポリス校 (St. John's College, Annapolis) を研究対象として取り上げる¹。具体的には、1957年からファカルティの一人として、また、1990年から1997年にかけての7年間はアナポリス校のディーンとして、同カレッジの教育活動を支えてきたエヴァ・T・H・ブラン (Eva T. H. Brann)²の論説に焦点をあて、ブランがセント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・プログラムをどのように擁護してきたのかという点について考察を行う。

油井大三郎が指摘するように、1980年代は、アメリカ合衆国において『「文化戦争 (culture wars)」と表現される』激しい論争が展開された時代であり、「大学のキャンパスなどでは西洋中心的で、白人男性中心的な表現の修正を求める『PC (政治的正しさ political correctness)』運動が活発化していった」。この「文化戦争」は、1990年代には「多文化主義論争」へと発展し、「国民のアイデンティティのあり方にも関わる広範な論争」が展開されている³。本稿では、1980年代以降、「文化戦争」や「多文化主義論争」が勃発し、西洋中心主義が批判の矢面に立たされる最中において、ブランが如何なる論理によってセント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・プログラムを擁護していたのか、その主張の構造を明らかにする。

そもそも「セント・ジョーンズは、1937年までは中程度の評判で、しかしその起源を1696年にまで遡ることができる、見事なまでに長寿のただの一つの (another) 小さなりベラル・アーツ・カレッジにすぎなかった」⁴。しかしながら選択科目制のプログラムをもつ一般的なカレッジであったセント・ジョーンズ・カレッジは、危機的な財務状況を背景として、1930年代後半に大きな転機を迎えることとなる。セント・ジョーンズ・カレッジの理事会は、抜本的な改革なくして同カレッジの生き残る術はないと判断し、1937年、グレイト・ブックス・プログラムの提唱者の一人であったストリングフェロー・バー (Stringfellow Barr) を第17代学長として招聘したのである⁵。

新学長のバーは、就任後すぐさまローズ奨学生時代からの盟友であったスコット・ブキャナン (Scott Buchanan) をディーンとして指名する。セント・ジョーンズ・カレッジの理事会もまた、ブキャナンのディーン就任を承認するとともに、シカゴ大学の学長であり、グレイト・ブックス・プログラムの中心的な唱道者であったロバート・M・ハッチンズ (Robert Maynard Hutchins) を新たな理事として迎え入れている。このようにして理事会にグレイト・ブックス・プログラムの良き理解者を得たバーとブキャナンは、1937年、「ニュー・プログラム」(The New Program) と呼ばれる新たな学士課程カリキュラムを導入したのである⁶。

このニュー・プログラムは、「セミナーでの書物の講読と討議」、「リベラル・アーツにおける特別な議題についてのフォーマルな講義」、「チュートリアル」、「実験室」(laboratories) という4つの教育方法から構成され⁷、そのカリキュラムの基盤となるものが西洋世界の名著であるグレイト・ブックスであった。またニュー・プログラムでは、「言語及び文学」、「リベラル・アーツ」、そして「数学及び科学」という3つの枠組みの下、学士課程の4年分のリーディング・リストがそれぞれの枠組み及び学年ごとに配当されている。例えば一年次の「言語及び文学」ではホメロスやヘロドトスが、「リベラル・アーツ」ではプラトンやアリストテレスが、「数学及び科学」ではユークリッドやアルキメデスがリーディング・リストに名を連ねている⁸。

学士課程教育をグレイト・ブックスによって貫徹しようと試みるこのセント・ジョーンズ・カレッジのニュー・プログラムは、当時のアメリカ高等教育界においては物議を醸す試みであった⁹。実際、これまでのアメリカ高等教育史通史叙述においても、ニュー・プログラムに対する批判的な反応がたびたび指摘されている。例えばジョン・S・ブルベイカー (John S. Brubacher) とウィリス・ルディ (Willis Rudy) は、セント・ジョーンズ・カレッジのカリキュラムが前提とするような、古典が「永続的なクオリティ」をもつとするような考え方は、「批判者にとって、攻撃の標的」であったと言及している¹⁰。フレデリック・ルドルフ (Frederick Rudolph) もまた、セント・ジョーンズ・カレッジのカリキュラム改革を、「混乱によってかき乱された社会と世界における秩序の追求の形跡」の一端として位置づける一方、その改革の方向性については、「それ自身を大多数の教育者や評者に好ましく思わせる着想ではなかった」と指摘している¹¹。さらにクリストファー・J・ルーカス (Christopher J. Lucas) も、ハッチンズ思想を受け継ぐ試みの一つとしてセント・ジョーンズ・カレッジに言及した上で、「批判者たちは、そうしたすべての発案は非民主主義的で時代遅れであり、現代のニーズを全く理解できていないものとして激しく攻撃した (assailed)」と指摘している¹²。

セント・ジョーンズ・カレッジのニュー・プログラムは、カレッジの財政状況を好転させるための打開策として導入されたが、その復古主義的傾向性は、同時代においてすら時代遅れであるとして批判を受けていた。しかしながらこのニュー・プログラムは、内容を部分的に改編しつつも、根幹部分はその後も堅持され続けている。また、1964年にセント・ジョーンズ・カレッジのサンタフェ校が開学されて以降は、グレイト・ブックスを根幹に据え置くこの学士課程プログラムが、アナポリスとサンタフェの二つのキャンパスで開講される運びとなっている¹³。1937年当時でさえ時代錯誤的であるとの批判を受けたセント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・プログラムは、幾許かのモデル・チェンジを経験しつつも、その基幹部分は今日に至るまで脈々と受け継がれているのである。

本稿ではまず、セント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・プログラムの変遷に焦点をあてた先行研究の検討を行う。次に、ブランのリベラル・エデュケーションと多文化主義をめぐる理解について解き明かすことを試みる。その上で、「文化戦争」や多文化主義を見据えつつも、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムを堅持し続けるというブランの、ひいてはセント・ジョーンズ・カレッジの判断が、如何なる論理によって導き出されているのかを明らかにすることとしたい。

2. 先行研究の検討

ここでは、セント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・プログラム史研究のなかでも、本稿が対象とする1980年代以降を射程に包摂した先行研究に限定して検討を行うこととする¹⁴。

そもそもセント・ジョーンズ・カレッジのニュー・プログラム史を編纂することは、同プログラムを導入した学長バーの念願であり、また、バー自らが執筆を手掛ける予定でもあった。もっとも、自らの老いには抗うことのできなかったバーの念願は叶わず、最終的に彼の願いは、セント・ジョーンズ・カレッジのファカルティの一人であり、1930年代にはヴァージニア大学でバーとブキャナンの薫陶を受けていたJ・ウィンフリー・スミス (J. Winfree Smith) の手に委ねられることとなる¹⁵。

スミスは、1983年に、ニュー・プログラム史研究の成果として、『自由な大学の探究——セント・ジョーンズのプログラムの起源』(*A Search for the Liberal College: The Beginning of the St. John's Program*) と題する著書を刊行している。スミスは同書において、1938-1939年度と1982-83年度の

リーディング・リストの著作者名等を付表として掲載しているものの、ニュー・プログラムの変遷に関わる詳細な叙述は1950年代までに留めており、1980年代以降についての詳細な検討は行っていない¹⁶。

2009年には、ケント・T・カベッジ (Kent T. Cubbage) が「アメリカのグレート・ブックス・カレッジとその成功、格闘、そして失敗の奇妙な歴史」(“America’s Great Books Colleges and Their Curious Histories of Success, Struggle, and Failure”)と題する博士論文を著し、セント・ジョーンズ・カレッジを含む6つのグレート・ブックス・カレッジを取り上げている。カベッジは、「文化戦争」や「多文化主義の高まり」といったグレート・ブックスを取り巻く逆風にひと言触れた上で、大差がないと思われがちなグレート・ブックス・カレッジは、実は「その成功の程度において」大きな開きがあると指摘している。その上で、グレート・ブックス・カレッジの成功と失敗を分かつ差異について考察することを研究目的に掲げている¹⁷。

カベッジの結論は、「教授法とグレート・ブックスのリストは、そのすべてのグレート・ブックス・カレッジにおいて、大部分似通っていた」というものであり、また「こうした機関の成功、格闘、あるいは失敗は、キャンパスの構成要素となる人々 (constituencies) の有効性と、彼らの間の関係におけるバランスやアンバランスの結果である」というものであった。カベッジの論文においてセント・ジョーンズ・カレッジは、トマス・アクィナス・カレッジとともにグレート・ブックス・カレッジの成功例として取り上げられており、「それらの構成要素となる人々は、理事会、学長、ファカルティから下は学生に至るまで、ともによく機能してきた」と指摘されている。カベッジは、「セント・ジョーンズ・カレッジとトマス・アクィナス・カレッジは、長期的で専門的な成功計画に対して十分に献身してきたのであり、それが安定した財政モデルへと結実した」と結論づけている¹⁸。

カベッジの研究の重点は、カレッジを構成する人々に置かれているものの、セント・ジョーンズ・カレッジのグレート・ブックス・リストの変遷についても部分的に言及が為されている。カベッジは、「そのリスト (セント・ジョーンズ・カレッジのグレート・ブックス・リスト) は完全には固定化されてはいない」(括弧内引用者)と述べつつも、「西洋文明の偉大な著作という点において、過去50年間、多くは変化していない」と指摘している。また、サンタフェとアナポリスの両キャンパスで修士課程のコースが開講されるようになったことや、サンタフェ校では東洋の古典に関する修士課程のプログラムが開講されるようになったことについても付言している¹⁹。

カベッジの論文は、グレート・ブックス・カレッジの持続可能性を探る上で、極めて興味深い研究である。ただしカベッジの論文においては、「文化戦争」や「多文化主義の高まり」という同時代的な文脈についての言及こそ為されているものの、こうしたグレート・ブックスを取り巻く西洋中心主義批判の逆境を前にして、セント・ジョーンズ・カレッジがどのような防衛戦を展開したのかという点については考察が行われていない²⁰。

管見の限り、セント・ジョーンズ・カレッジの学士課程カリキュラム史を最も詳細に検討しているのがウィリアム・S・ルール (William Scott Rule) である。ルールは、2009年に著した「セント・ジョーンズ・カレッジにおける変容するグレート・ブックスの70年」(“Seventy Years of Changing Great Books at St. John’s College”)と題する博士論文において、1937年から2008年に至るまでのセント・ジョーンズ・カレッジにおけるリーディング・リストの変遷を縦断的に調査している。その上で、72年間変わらずリーディング・リストに残り続けた著作者、オリジナルのリストには存在しなかったが後からリストに付け加えられた著作者、途中でリストから削除された著作者、更には追加された後に削除

された著作者をそれぞれリストアップすることで、セント・ジョーンズ・カレッジにおけるグレイト・ブックス・プログラムの変化を詳らかにしている²¹。

ルールは、アフリカ系アメリカ人のブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington) らが途中でリーディング・リストに追加されてはいるものの、「セント・ジョーンズはリーディング・リストの多様性という要求に応答しそこねた」と指摘している。また、東洋の古典についての大学院のプログラムがサンタフェ校で開始されたことにも言及した上で、「私は、この比較的新しいプログラムが長く続く学士課程のプログラムに影響を与えたという証拠を何も発見できなかった」と付言している。この点にかかわってルールは、なぜセント・ジョーンズ・カレッジの学士課程プログラムが、「リーディング・リストの多様性」という要求に応じてこなかったのかという理由については、「たとえリストの多様性によって直接的に表象されていなかったとしても、グレイト・ブックスはどれであれ、ジェンダー、人種、そして出自といったトピックについて十分に議論し得るだけの素材を含んでいる」という主張があったのではないかと推測するとどまり、この推測の域を越えて、実際に同カレッジ内での議論やファカルティの言説を取り上げることはしていない²²。

そこで本稿では、先行研究では十分にスポットライトがあたってこなかった、「文化戦争」や多文化主義を見据えたセント・ジョーンズ・カレッジにおけるファカルティの言説を取り上げることで、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムがどのように擁護され得るのかを検討することとした。

3. リベラル・エデュケーションと多文化主義

3-1. ブランのリベラル・エデュケーション理解

ブランは、アナポリス校のディーンを務めていた1992年11月、ピッツバーグ大学で「リベラル・エデュケーションと多文化主義——友か敵か」(“Liberal Education and Multiculturalism: Friends or Enemies?”)と銘打った講演を行っている²³。ここでは、このピッツバーグ大学での講演原稿をひもときながら、リベラル・エデュケーション及び多文化主義をめぐるブランの見解を明らかにすることとした²⁴。

講演の冒頭部分においてブランは、「多文化主義というトピックをめぐる、主として雑誌、ジャーナル、そして急ごしらえで記された書籍での莫大な著作のコレクションが生成されてきた」と述べ、アメリカ合衆国において多文化主義論争がエスカレートしている現状を報告している。その上で、「『文化戦争』として言及される現象は、主として学術的な関心事であると一般的に了解されている」と述べるとともに、「論争が学校において行われていることから」、「それはほぼ確実に教育分野の現象である」と指摘している²⁵。

ブランは、「この論争における思想や用語、起源や結末について幾許か明瞭にすることは、来世紀において継続してであろう長期的な調整に向けて、最良の始まりを形成することであろう」と述べ、多文化主義論争を踏まえたリベラル・エデュケーションのあり方を模索する上で、まず、リベラル・エデュケーションという用語の構成概念から考察を始めている²⁶。

ブランによれば、そもそも「リベラル・エデュケーションのまさに最古の理解はアリストテレスに由来するものであり、『自由な (liberal)』という言葉において感知される (heard) 自由 (liberty) を重要視するものである」。ブランは、このリベラル・エデュケーションにおける自由の意味に関わって、

次のように述べている。「リベラル・エデュケーションは、労働からの実際上の自由、すなわち事実上の余暇だけでなく、ある種の悠々たる見解、すなわち教育は気詰まりな (constraining) 専門職や窮屈な (binding) 職業を直接の目的として (immediately for) 企てられるべきものではなく、それが学生にある種の自由を与えるものであるという感覚をも前提とするものである。それは、詩や新しい理論のような、主としてそれら自体を目的として知る価値のある事物を自由に学ぶという、また、例えばニヒリズムや独我論のような、大胆であり最終的には恐らくは支持されないであろう見解を真剣に受け入れるというような、非実用的であり得る自由である」²⁷。

以上のようにリベラル・エデュケーションは、実用性にしばられない自由を、そして自由な学びを学生に与えるものとしてブランに理解されている。

3-2. ブランの多文化主義理解

「多文化主義」という言葉は、論者によって必ずしもその意味するものが一様ではない。例えば油井は、「論争の内容を詳しく検討してゆくと、多文化主義を擁護するものと批判するものとの関係は極めて錯綜しており、多文化主義の定義についても多様な見解が入り乱れているのが実状である」と述べている²⁸。井上達夫もまた、「『多文化主義 (multiculturalism)』という言葉はいまや広く流通しているが、それだけに、人によってその意味・用法にはズレがあるようである」と指摘している²⁹。

ここでは、ブランの提示する「多文化主義」の構成概念に焦点をあてることとする。ブランは、「多文化主義」という用語を説明する上で、その比較対象となるメルティング・ポット論や「多元主義」(Pluralism) を取り上げ、その指し示す内容を確認している³⁰。

まずブランは、「メルティング・ポット論は、すべての移民が、広く普及しているアングロサクソンの主流 (文化) の中に溶け込むことになる」(括弧内引用者) 理論であると説明した上で、メルティング・ポット論と比較して「より寛容で、より穏和な観念」として、多元主義を取り上げている。ブランによれば、「多元主義者は、共通のアメリカの地盤に基づいたアメリカ文化の多様性を賞賛し、奨励した」のであり、かつてのアメリカの姿こそが、多元主義の世界のあり方であるとブランは指摘している。この多元主義の時代のアメリカでは、平日は皆、学校や職場等の共通の世界で過ごす一方、週末にはそれぞれのバックグラウンドとなる世界に舞い戻り、例えば「我々のユダヤ教会、或いはギリシャ正教の教会に通い、ヘブライ語やノルウェー語を学び、ブラットブルストやケフテデスを食べた」のだとブランは説明している³¹。

ユダヤ人として生まれ、12歳のときにナチスが支配するドイツから難民としてアメリカに渡り、その後ブルックリン・カレッジを経てイエール大学で修士号と博士号を取得するなど³²、アメリカ社会の主流文化とは異なるバックグラウンドをもちながら、他方でメインストリームの学校教育を受けてきたブランにとって、平日はアメリカの共通の地盤の上で過ごし、週末は出自となる文化に身を浸して過ごすというこの多元主義の社会像は、彼女自身がその生い立ちにおいて経験したアメリカ社会の姿そのものであった³³。

次にブランは、多文化主義の構成概念を取り上げている。ブランはまず、「その最も根本的な理論化に際して、それ (多文化主義) は共通のアメリカの地盤を認めず、週末の民族意識も許さないという点において多元主義とは異なる」(括弧内引用者) と指摘する³⁴。ブランによれば、多文化主義は多元主義とは異なり、アメリカ社会の共通の基盤を認めないため、平日は共通世界で、週末は出自となる文化

世界で過ごすというかつてのアメリカ社会の姿は、多文化主義者には是認されないということになる。

さらにブランは、「幾人かの多文化主義者は過激な分離主義者である」と述べるとともに、「学校教育や社会生活も含めて、特定の文化が全面的に存在を広げるものであり、また（広げる）べきであると彼らが主張する点において、彼らは分離主義者であることに加えて、文化的な全体主義者である」（括弧内引用者）と批判する。この点に関わってブランは、ルーツとなる文化世界を護持させるためのプレッシャーが存在すると指摘している。ブランはその一例として、「若い黒人の学生が、不誠実にもそれ自体を普遍的なものであるかのように見せているある伝統に対してあまりに多く関わることで、彼ら自身が彼らの文化的なルーツから離脱することがないようにするべく、人種を彼らの知的な生活における主要な見方にするよう、彼らの同輩によって課せられている圧力」が存在すると述べている。ブランは、このような「多文化主義における『文化主義（culturalism）』は、認識（perception）であると同時にプログラムである」と論じている。すなわち、多文化主義における「文化主義」は、「人間存在における圧倒的な『文化』の重要性という認識と、その事実を人々に強制的に認識させようとするプログラム」という二つの側面を持つ、と主張するのである³⁵。

3-3. 多文化主義とリベラル・エデュケーションの関係性

上述した多文化主義における「文化主義」のもち得る二つの側面を踏まえつつ、ブランは、この二つの側面の後者、すなわち「強制のプログラムは、その本質において、プロパガンダと相反する自由な学びに対して有害である」と指摘している。また、「リベラル・エデュケーションとラディカルな多文化主義は、まったくもって敵である」と主張している。何故なら、自由な学びやリベラル・エデュケーションは、「前もって決定づけられた精神の状態をもたらそうと試みることに以上、事物が真実においてどうであるかを問うことにより関心がある」からである³⁶。

もっとも、多文化主義における「文化主義」が強制性の故に批判され、またリベラル・エデュケーションの前提する自由の理念と真っ向から対立するとしても、ブランは、「多文化主義の『多（multi）』、すなわち多くのサブカルチャーを輪郭付ける多くの線に沿ってアメリカは分かれており、そのそれぞれが人間的な配慮に値するだけでなく、学術的な包有物に値するという主張」については、肯定的に叙述している。「というのも、彼ら（学生たち）があらゆる種類の様式に対してオープンになるように、狭量な見解から学生たちを解放することは、リベラル・エデュケーションの要素であるからである」（括弧内引用者）。この点に関わってブランは、「リベラル・エデュケーションが真に根を下ろした学生は、なじみのあるものであれ、なじみのないものであれ、人類学の研究報告書の熱心な読者となり、また、共有する慣習の長所を認める観察者に自然となるであろう」と述べている³⁷。

ブランは、このような多文化主義の「多」の部分が示唆する多様な文化への配慮と学術的な包有、そして「一つの国家における多様な生活様式の承認」こそが、本来であれば「多文化主義という言葉が意味するべきもの」であると主張する。ブランによれば、「このような種類の多文化主義」は、「幾つかの人口統計上の変化という圧力を受けた、新しい装いの古くからの多元主義」であり、また「リベラル・エデュケーションの誠実な提唱者に対して、幾つかの深刻で品位のある問題を提示する」ものであるという。ブランは、この「幾つかの深刻で品位のある問題」の具体例として、「教育者たちは、如何なる様式や感性、如何なる慣習や道徳を説き聞かせるべきであろうか」という問いや、「カレッジは、その学生たちに対して、人間の本質の普遍性を強調するべきか、あるいはその個別性に焦点をあてるべきか」

といった問いを挙げている³⁸。

以上のような議論を踏まえた上でブランは、文化主義的側面が強い多文化主義を「排他的な多文化主義」(exclusive multiculturalism)と呼び、他方でその対抗概念として、すべての文化を尊重する多文化主義を「インクルーシブな多文化主義」(inclusive multiculturalism)と呼称している。そして、「インクルーシブな多文化主義は、リベラル・エデュケーションを活気づける問題を提起するが、排他的な多文化主義は徹底的な敵である」と述べ、「今からそれほど長時間が経たずとも、リベラル・エデュケーションの敵である排他的な多文化主義は、学術的な姿勢として過去のもの(history)となるであろうと私は考える。他方でインクルーシブな多文化主義、すなわち昔ながらの多元主義は、予見可能な未来を求めるカレッジや大学を苦しめるであろう。しかし、それはリベラル・エデュケーションを破壊するのではなく活気づける性質の、友好的な悪魔であることが判明するであろう」と結論づけている³⁹。

なお、1990年代前半に、多元主義的な立場から多文化主義の自民族中心主義的側面に対する批判を展開したのは、ブランだけではない。例えば油井が指摘するように、「『文化多元主義(cultural pluralism)』を推進していた知識人」の一人であり、「ケネディ大統領の特別補佐官として一連の改革を推進したアーサー・シュレージンガー二世」もまた、多文化主義におけるアフリカ中心主義的側面を批判している⁴⁰。ブランの言説は、決して奇異なものではなく、多元主義者による自民族中心主義的な多文化主義批判という、同時代的な事象の一つであったと理解することができる。

4. 西洋中心主義批判とグレイト・ブックス・プログラム

4-1. グレイト・ブックス・プログラムに寄せられる声

前章で確認したように、ブランは「排他的な多文化主義」に対して批判を加えつつも、昔ながらの多元主義であるところの「インクルーシブな多文化主義」については、肯定的な評価を与えている。アメリカ社会を構成するすべての文化への配慮を包摂する「インクルーシブな多文化主義」がもし是認可能なものであるとすれば、グレイト・ブックス・プログラムも、西洋中心主義に固執することなく、多種多様な文化を含むような形で改編されても良いように思われる。しかしながらセント・ジョーンズ・カレッジの学士課程プログラムは、前述した通り、リーディング・リストに多少の変動こそあれど、西洋中心のカリキュラムを堅持し続けている。本章では、ブランが「インクルーシブな多文化主義」に理解を示しながらも、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムの継続をどのように正当化しているのかという点について考察を加えることとする。

ブランは、1992年に発表された「セント・ジョーンズ・カレッジのブックリストについての目下の質問」(“Current Questions about the St. John’s College Book List”)と題した論説において、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムに対して投げかけられた疑問や批判を踏まえた上で、同カレッジに寄せられる思いや声を次の三点に整理している。第一に、「必読書のリストを組み合わせることで、人類社会を作りあげていくすべての多様な集団——文明、信仰、人種、専門職——によって生み出される偉大な作品の公平な抽出を、我々が確実に取り入れるようにする」ことへの期待。第二に、「白人、男性で、且つ亡くなって久しいヨーロッパや北アメリカの著作者」による作品だけでなく、「女性やマイノリティの作家によるより新しい作品によって、このリストのバランスをとる」ようにすることへの期待。そして第三に、「こうした後者の集団(女性やマイノリティの集団)に属する学生は、彼らによって、或いは(彼ら)のために、或いは(彼ら)についてさえ多くは書かれていない書物から、彼らが必要

とするものを得るのに耐え難い時間を過ごすかもしれない」(括弧内引用者)という不安の声である⁴¹。

西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムの是正を促すこのような声に対し、ブランがどのように応答しているのか、その返答を次に見ていくこととしたい。

4-2. ブランからの応答

(1) 第一の声に対する応答

まず、すべての集団がプログラムにおいて表象されることを期待する第一の声に対する反論を見ていくことにしよう。ブランは、「一番目の質問に対して応答することは、我々にとっては最もたやすいことである」と述べた上で、「なぜなら我々の回答は、実際的な教育上の必然性によってあまりにも大きく制約されているからである」と続けている。この点に関わってブランは、「東洋及び西洋の文学作品や神聖なテキストだけでも考えてみなさい。我々が自分たちの学生と過ごす短い4年間のうちに、我々に何ができるというのだろうか」と疑問を投げかけている。また、仮にすべての集団が表象されるようにカリキュラムを組んだとしても、「そうしたまだら模様の概説は、その作品の品位を傷つけることになるであろうし、我々の学生を満足させるものにはならないであろう」と反論している⁴²。

さらにブランは、セント・ジョーンズ・カレッジのカリキュラムは「西洋の伝統からの一連の作品」で構成されているが、リーディング・リストの「それぞれの作品は、それ自体が極めて理解しやすいものであることから、また、他の作品とともにそれが統合された全体を構成するものであることから選ばれている」(傍点引用者)と付言している⁴³。すべての文化をカリキュラムに包摂しようと試みることは、すべての文化を表層的に扱うことになるのみならず、有機的に「統合された全体」、すなわち統一的なカリキュラムを具現不可能にする、とブランは示唆している。

あらゆる文化を包摂したカリキュラムを実現することの現実的な不可能性は、「護られた聖典」(“The Canon Defended”)と題する論稿においても主張されている。同論稿においてブランは、「もし表象が一つの原理となるべきであるならば、すべてのものが発言権をもたなければならない」と述べた上で、「お互いに一緒にたに扱われることを拒絶する20を超えるアジア系アメリカ人の国家的な団体が存在することを私は理解している」と続けている。そして、「どのようにしてリソースの限られた一つのカレッジが、理に適った選択を為し得るのだろうか」と疑問を投げかけるとともに、「すべてを包括すること (inclusivity) は間違いなく不可能であり、且つ排除は今や不公平になる」と指摘し⁴⁴、すべての文化を一つのカリキュラムに包摂させようとする考え方そのものの問題点を浮き彫りにしている。

(2) 第二の声に対する応答

女性やマイノリティの作家をリーディング・リストに組み込むことによってバランスを取るよう期待する第二の声に対しては、ブランは「もちろん、我々は、最近になって立ち現われてきた集団が、プログラムにおいて十分に表象されていないという事実を見過ごすことはできない」と応答している。ただブランは、このアンバランスな表象をめぐる問題を「野蛮な歴史的事実」として言及しつつも、「ただそれらが女性や黒人によって書かれているからという理由で、或いはそれらが鮮烈な時事的関心事であるからという理由によってさえ、我々は、作品を(リーディング・リストに)含めるよう自分自身を導くことはできないであろう」(括弧内引用者)と述べている。その理由は、ブランによれば、グレイト・ブックスが「集団の利益を表象するもの」ではなく、「時として急進的で独立した個人の思想を提示するもの」として捉えられているからである⁴⁵。

この点にかかわってブランは、「すべての書物は、その著者の性別、人種や社会的な出自によって殆ど全面的に規定されている」という主張があることは認識しつつも、「しかし我々は、一人の思考する人間は、これらの事情を越えて突き抜け得ると信じ続けている」と述べている⁴⁶。書物は必ずしもその著者の性別や人種、社会的な属性によって規定されるものではなく、むしろ著者の属性を越え得るとブランは考えているのである。

書物が著者の属性によって規定されるという考え方に対しては、「護られた聖典」においても、ブランは真っ向から異を唱えている。まず、著者の性別によって作品の性格が規定され得るという見解に対しては、「例えば『ミドルマーチ』の読者は、ジョージ・エリオットの性別を、確信をもって分かり (sure of) 得るのであろうか」と疑問を投げかけている。また、著者の人種という属性が著作の性質を左右するという考え方に対しても、黒人女性作家のトニ・モリソン (Toni Morrison) の『ソロモンの歌』(Song of Solomon) を一例として挙げながら、「旧世代の黒人男性、新世代の黒人女性、新興のアジア系アメリカ人の作家」は、「英語における小説の技巧」に熟達しており、「彼らもまた、西洋の文学的伝統を自在に使いこなしている」と指摘している⁴⁷。作品は、必ずしも著者のバックグラウンドによって規定される訳ではない、とブランは反駁するのである。

(3) 第三の声に対する応答

女性やマイノリティの学生が、自らの属性とは関わりのない著者の作品を読むことに苦勞するのではないかという第三の声に対しては、ブランはまず、「我々は、我々の学生人口の半分を占める女性や、増えつつあるアジア系、そして黒人の学生が、ここでどのように過ごしているかという問いに対して我々が取り組まなければならないということは分かっている」と応じている。その上で、第三の声が前提するものとして次の二点を指摘している。一つ目は、「一人ひとりの人間の人生は、彼らの性別や彼らの人種、そして過去に為された不正義によってあまりに大きく性格づけられており、そうであるが故に彼らの教育は、このような事実注意到注意を払わなければならない」という前提である。二つ目は、「例えば女性などの、ある集団によって、或いは(ある集団)について、若しくは(ある集団)のために書かれていない作品は、彼らに対して語りかけるものが少ない」(括弧内引用者)という前提である。ブランは、この後者の前提に対しては、具体例をもって反証しようと試みている⁴⁸。

まずブランは、若い女性が読書をしていて、ホメロスによるアキレスについての描写に遭遇した場面を仮想の事例として挙げている。この若い女性は、男性のアキレスになかなか共感することができないかもしれないとブランは指摘する。「また彼女は、彼の致命的な自尊心を、典型的な男性の欠点であると思わずかもしれない」とブランは続けている。しかしながらそうであったとしても、他方で「そうした女性がより勇ましい気分するときには、何の苦も無く彼の燃えるような怒りに感情移入するかもしれない」とブランは主張している⁴⁹。

次にブランは、「如何なる男性も、女性の領域についてその内側から執筆することができないということは、兎にも角にも明白であるように見える」と述べた上で、「それにもかかわらず男性は、ホメロスのナウシカアやトルストイのナターシャのような魅力的で複雑な少女から、アイスキュロスのクリュタイムネストラやウェルギリウスのディーダーのような荘厳で猛烈な女性に至るまで、女性の人柄を、説得力をもって叙述してきた」と指摘する。そして、男性の著者による「これらの壮麗な描写は、女性による女性の状況についての作品 (tract) がそうであり得るのと同様、女性さえも——あるいは男性も——啓発し (illuminating) 得るものである」と主張している⁵⁰。

このように、男性の著作者による男性についての描写であったとしても、女性が感情移入をしたり共感したりすることはあり得るのであり、また男性の著作者による女性の描写であったとしても、女性を啓発することがあり得るのだとブランは指摘している。読者が仮にマイノリティとなる属性をもつ者であり、読まれる書物が同じ属性をもつ著作者によって、或いはその属性をもつ者について、或いはその属性をもつ者のために書かれたものではなかったとしても、依然としてその書物がマイノリティの読者を啓発することはあり得るのであり、故に読者の属性に合わせてリーディング・リストを改編する必要性はないとブランは示唆していると考えられるのである⁵¹。

4-3. セント・ジョーンズ・カレッジの変化

上述した通り、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムに寄せられる三つの声に対しては、ブランはそのすべてに対して反駁を試みていた。ブランが、「インクルーシヴな多文化主義」について肯定的に叙述しつつも、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・リストを大きく改編しようと試みなかった理由は、この反駁において3点示唆されていた。第一の理由は、四年間の学士課程教育には時間的な制約があり、すべての文化圏の著作を扱うことはそもそも物理的に不可能であること。第二の理由は、著作者の性別や人種、社会的な背景が必ずしも著作の性質を決定するものではない以上、著作者のバックグラウンドを理由として読む書物を決定することに論理必然性がないこと。第三の理由は、グレイト・ブックスのような著作は、読者の属性の如何を問わずに啓発的な書物となり得るものであり、故に読者の属性を踏まえてリーディング・リストを改編する必要性がないこと、である。

スタンフォード大学の一般教育プログラムが、多文化的なカリキュラムへと改編された1988年以降⁵²、高等教育カリキュラムの多文化化をめぐるせめぎ合いは、マスメディアの関心をも集めるようになっていく。例えば『ニューヨーク・タイムズ』(*The New York Times*)紙は、1993年1月10日の記事で大学カリキュラムの改革動向を取り上げている⁵³。同日の『ニューヨーク・タイムズ』紙には、「セント・ジョーンズは古典に執着」(“St. John’s Clings to Classics”)という記事も掲載され、西洋中心主義的な学士課程カリキュラムを維持し続けるセント・ジョーンズ・カレッジの動向も紹介されている⁵⁴。

多文化主義の荒波に対してブランが論陣を張り、学士課程におけるグレイト・ブックス・プログラムを維持し続けたセント・ジョーンズ・カレッジではあるが、学士課程の中核となるカリキュラム以外においては、従来の西洋中心主義的な枠組みに留まらない活動が展開されている。例えば、1965年からセント・ジョーンズ・カレッジのファカルティを務めるジョージ・ドスコウ(George Doskow)は、同カレッジ内で「多文化のスタディ・グループ」を指導しており、このことが、前述の「セント・ジョーンズは古典に執着」と題する記事で紹介されている⁵⁵。ブラン自身もまた、セント・ジョーンズ・カレッジの学生たちによって、リーディング・リストに掲載されていない作品を読む「ゲリラ・セミナー」(*guerilla seminars*)が組織されていると報告している⁵⁶。加えて、既に言及したように、1994年には東洋の古典に特化した修士課程のコースがサンタフェ校で正式に開講されている⁵⁷。

セント・ジョーンズ・カレッジは、多文化主義という外圧に屈することなく、「ニュー・プログラム」より連綿と受け継がれた学士課程のグレイト・ブックス・プログラムの骨格を堅持し続けた。しかしながら自由な学びを探究するリベラル・アーツ・カレッジという学習環境の下、セント・ジョーンズ・カレッジでは結果的に多文化に目を向ける学習活動が生まれ、またサンタフェ校では東洋の古典コースという修士課程のプログラムが新たに開講される運びとなっている。

ブランは、グレイト・ブックス・プログラムを、個々のグレイト・ブックスが有機的な繋がりをもつ「統合された全体」であると捉えていた⁵⁸。サンタフェ校での東洋の古典に特化した大学院レベルのコースの開講は、時間的な制約という物理的な条件がクリアされ、また啓発的な書物によって「統合された全体」を構成するような統一的なカリキュラムを組むことさえ可能であれば、セント・ジョーンズ・カレッジが必ずしも西洋中心主義に固執しないことを示す一つの証左として理解することができるのではなかろうか。

5. おわりに

本稿では、ブランの講演原稿や論稿をひもときながら、多文化主義の嵐が吹き荒れる最中、セント・ジョーンズ・カレッジの西洋中心主義的な学士課程カリキュラムがどのようにして擁護されてきたのか、その論理構造を検討してきた。

すべての文化を一つのプログラムに表象させることの不可能性や、著者の属性が作品を規定するという臆見など、ブランの指摘は、カリキュラムの安易な多文化化が前提とする理論上及び実際上の問題点を浮かび上がらせるものであった。またブランの論説は、グレイト・ブックスが、多様なバックグラウンドをもった読者に対して灯明となり得ることを示唆するものでもあった。

1937年の導入時でさえ、既に時代遅れであるとの批判を受けたセント・ジョーンズ・カレッジの「ニュー・プログラム」の伝統は、「文化戦争」の勃発や多文化主義の台頭という試練を潜り抜けて、今日に至るまで脈々と受け継がれている。西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムの伝統が、セント・ジョーンズ・カレッジにおいて絶えることなく存続し続けていることの意味を、我々は考えなければならぬであろう⁵⁹。

注

- ¹ セント・ジョーンズ・カレッジのアナポリス校の現在の学士課程のカリキュラムについては、同カレッジのウェブサイトを参照されたい。URL: <https://www.sjc.edu/academic-programs/undergraduate> (accessed November 15, 2016)
- ² Eva Brann, "About the Greatness of Great Books", in Nicholas Ayo, C.S.C. and Michael J. Crowe (eds.), *Liberal Learning and the Great Books: Twelve Presentations at a Conference Held April 4-5, 2001 Celebrating the Fiftieth Anniversary of the Founding of the Program of Liberal Studies, the Great Books Program of the University of Notre Dame*, Notre Dame: The University of Notre Dame, 2002, p. 6.
- ³ 油井大三郎「序 いま、なぜ多文化主義論争なのか」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ——揺らぐナショナル・アイデンティティ』東京大学出版会、1999年、6-7頁。なお、油井は「文化戦争」という用語に関わる典拠としてジェイムズ・D・ハンター (James Davison Hunter) の研究を挙げているが (同上、7, 18頁)、ハンターは、「文化戦争」の「紛争の源は、異なった道徳的理想像 (visions) の中に見出される」ものであると主張し、「現今の紛争」の対立構造は、例えば「政治的な『自由主義者たち』と『保守主義者たち』の間の論争」というような単純なものではないと指摘している。James Davison Hunter, *Culture Wars: The Struggle to Define America*, New York: Basic Books, 1991, p. 48.
- ⁴ Robert Kanigel, "Where Great Books Are the Teachers: For 50 Years, St. John's College Has Been an Island of Idealism," *The New York Times*, September 21, 1986.
- ⁵ Emily A. Murphy, "A Complete & Generous Education": *300 Years of Liberal Arts, St. John's College, Annapolis*, Annapolis: St. John's College Press, 1996, pp. 79, 84, 90, 107.
- ⁶ *Ibid.*, pp. 79, 84, 90. バーの学長就任後には、モーティマー・J・アドラー (Mortimer Jerome Adler) やマーク・ヴァン・ドレーン (Mark Van Doren), アレグザンダー・マイケルジョン (Alexander Meiklejohn) といった、錚々

たるグレイト・ブックス・プログラムの提唱者たちも、セント・ジョーンズ・カレッジに講師として来校している。Ibid., p. 97. なお松浦良充は、ハッチンズが晩年に展開した「学習社会論においては、彼はもはやグレート・ブックスや伝統的リベラル・アーツによる教育を主張しはしないのである」と指摘している。松浦良充「ロバート・M・ハッチンズ『学習社会』論の思想的基盤——自由教育思想と公教育制度批判」『関東教育学会紀要』第11号、1984年9月、37頁。

⁷ Emily A. Murphy, "A Complete & Generous Education," p. 97.

⁸ Scott Buchanan, "The New Program at St. John's," in *The New Program at St. John's College in Annapolis: Supplement to Bulletin*, Annapolis: St. John's College, 1937, p. 16.

⁹ 例えば、サラ・ローレンス・カレッジの学長であったコンスタンス・ウォーレン (Constance Warren) は、「これらの古典みずからが教えると主張すること」は「ばかっている」と批判している。Constance Warren, "The Right and Left Wings in Education," *The Journal of Educational Sociology*, Vol. 18, No. 3, November 1944, p. 167.

¹⁰ John S. Brubacher and Willis Rudy, *Higher Education in Transition: A History of American Colleges and Universities, 1636-1976*, New York: Harper & Row, Publishers, 1976, p. 275.

¹¹ Frederick Rudolph, *The American College and University: A History*, Athens: The University of Georgia Press, 1990, p. 480.

¹² Christopher J. Lucas, *American Higher Education: A History*, New York: St. Martin's Griffin, 1994, p. 219. アーサー・M・コーエン (Arthur M. Cohen) も、「1828年のイェイル・レポートから1930年代のグレイト・ブックスに至るまでに正当化された、古典の研究を中心におくカリキュラムは、高等教育の全組織の中で、ほとんどの場合はセント・ジョーンズ・カレッジやより小規模の幾つかのカトリックのカレッジのような私立の機関における、小さな居場所に留まった」と記述しており、グレイト・ブックス・プログラムをカリキュラムの中心とする高等教育機関が少数派であったことを示唆している。Arthur M. Cohen, *The Shaping of American Higher Education: Emergence and Growth of the Contemporary System*, San Francisco: Jossey-Bass Publishers, 1998, p. 145.

¹³ J. Winfree Smith, *A Search for the Liberal College: The Beginning of the St. John's Program*, Annapolis: St. John's College Press, 1983, pp. 1, 125.

¹⁴ 1980年代を叙述対象に含めるものではないが、セント・ジョーンズ・カレッジのニュー・プログラム史を扱った研究として、以下の論稿を指摘することができる。Warren C. Bomhardt, "The St. John's College Program: Its History and Development," M.A. thesis, Loyola College, 1968.

¹⁵ J. Winfree Smith, *A Search for the Liberal College*, p. v, vii.

¹⁶ Ibid., pp. vii, 128-129. なお、1938-1939年度において「言語及び文学」、「リベラル・アーツ」、「数学及び科学」という3つの枠組みから構成されていたカリキュラムは、1982-83年度においては「文学」、「哲学及び神学」、「歴史及び社会科学」、「数学及び自然科学」、そして「音楽」の5つの枠組みに改編されている。「音楽」については、2年次にはバッハやモーツァルト、ベートーヴェンをはじめとする9名の作曲家が、3年次にはモーツァルトのみが、4年次はワーグナーのみがカリキュラムの内容として挙げられている。Ibid., pp. 128-129.

¹⁷ Kent T. Cubbage, "America's Great Books Colleges and Their Curious Histories of Success, Struggle, and Failure," Ph.D. dissertation, University of South Carolina, 2009, pp. 3-6.

¹⁸ Ibid., pp. iv, 196.

¹⁹ Ibid., pp. 45-68, 196, 273.

²⁰ なおカベッジは、セント・ジョーンズ・カレッジのカリキュラムの安定化に貢献した重要な人物としてブランを挙げ、ファカルティや、「キャンパスの構成要素となる人々の間の相互関係と健全なバランス」についてのブランの発言を引用している。Ibid., pp. 65-66, 258-259, 297-298. しかしながらカベッジは、「文化戦争」や多文化主義を見据えたブランの言説については、考察の対象として取り上げていない。

²¹ William Scott Rule, "Seventy Years of Changing Great Books at St. John's College," Ph.D. dissertation, Georgia State University, 2009, pp. 142-149.

²² Ibid., pp. 146, 154. なおルールは、サンタフェ校において大学院レベルの東洋の古典プログラムが正式に開講された年を「1998年」と記述しているが (Ibid., p. 154), セント・ジョーンズ・カレッジのウェブサイトにも記さ

れているように、正しくは「1994年」である。URL: <https://www.sjc.edu/about/history> (accessed November 15, 2016)

²³ Eva T. H. Brann, “Liberal Education and Multiculturalism,” *Vital Speeches of the Day*, Vol. 59, No. 7, January 15, 1993, p. 221.

²⁴ 本稿では、多文化主義とリベラル・エデュケーションをめぐるブランの言説のみを取り上げる。アメリカ合衆国におけるリベラル・エデュケーションの抱える課題や、レオ・シュトラウス (Leo Strauss), アラン・ブルーム (Allan Bloom), そしてリチャード・ローティ (Richard Rorty) の古典論の意義については、以下の文献を参照されたい。藤本夕衣『古典を失った大学——近代性の危機と教養の行方』NTT出版, 2015年。

²⁵ Eva T. H. Brann, “Liberal Education and Multiculturalism,” p. 221.

²⁶ Ibid.

²⁷ Ibid., p. 222.

²⁸ 油井大三郎「序 いま、なぜ多文化主義論争なのか」, 2頁。

²⁹ 井上達夫「3 多文化主義の政治哲学——文化政治のトゥリアーデ」油井大三郎・遠藤泰生編, 前掲書, 87頁。

³⁰ Eva T. H. Brann, “Liberal Education and Multiculturalism,” p. 223.

³¹ Ibid.

³² ブランの博士号取得に至るまでの来歴については、以下の2つの文献による。Emily A. Murphy, “A Complete & Generous Education,” p. 186. Eva Brann, *A College Unique and Universal*, Santa Fe: St. John’s College, 2006, p. 2.

³³ Eva T. H. Brann, “Liberal Education and Multiculturalism,” p. 223.

³⁴ Ibid.

³⁵ Ibid.

³⁶ Ibid.

³⁷ Ibid., p. 224.

³⁸ Ibid.

³⁹ Ibid.

⁴⁰ 油井大三郎「序 いま、なぜ多文化主義論争なのか」, 7頁。シュレージンガー二世は、アフリカ中心主義を、「真のニーズから注意をそらすのみならず、問題を激化させる」と批判している。また、アメリカ合衆国の課題は、「如何にして結束の紐帯 (bonds) を破壊することなく、大切にされてきた文化や伝統を擁護するか」と主張している。Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Disuniting of America: Reflections on a Multicultural Society*, New York: W. W. Norton and Company, 1992, pp. 102, 138.

⁴¹ Eva Brann, “Current Questions about the St. John’s College Book List,” *Letters from Santa Fe*, Summer 1992, p. 8.

⁴² Ibid.

⁴³ Ibid.

⁴⁴ Eva T. H. Brann, “The Canon Defended,” *Philosophy and Literature*, Vol. 17, No. 2, October 1993, p. 208.

⁴⁵ Eva Brann, “Current Questions about the St. John’s College Book List,” p. 9.

⁴⁶ Ibid.

⁴⁷ Eva T. H. Brann, “The Canon Defended,” pp. 197–198.

⁴⁸ Eva Brann, “Current Questions about the St. John’s College Book List,” pp. 9–10.

⁴⁹ Ibid, p. 10.

⁵⁰ Ibid. なお、1992年時点でのセント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・リストには、ジェイン・オースティン (Jane Austen) やヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) のような女性の著作者が含まれている。

⁵¹ Ibid.

ブランは「護られた聖典」においても、「グレイト・ブックスは殆どすべて、個々人の人間の精神、生命 (creature), 或いは人格に関わるものであり、それは第一に、性差をもたず (genderless), 肌の色をもたず (colorless), そして階級と関わらない (classless) ものである」と主張している。Eva T. H. Brann, “The Canon Defended,” p. 210.

- ⁵² 松尾知明『アメリカ多文化教育の再構築——文化多元主義から多文化主義へ』明石書店、2007年、80-81頁。
- ⁵³ William Celis 3d, "College Curriculums Shaken to the Core: What Should All American Undergraduates Know?" *The New York Times*, January 10, 1993.
- ⁵⁴ Ruth M. Bond, "St. John's Clings to Classics," *The New York Times*, January 10, 1993.
- ⁵⁵ Ibid. なお、三年生と四年生が履修する、「個々に組織されたスタディ・グループ」で行われる「8週間」の選択講座においては、「第三世界の文化」について学ぶ学生が増えているとも記されている。Ibid.
- ⁵⁶ Eva T. H. Brann, "The Canon Defended," p. 211.
- ⁵⁷ なお、東洋の古典を扱う「実験版」のコースが1992年に開始されている。Carolyn J. Mooney, "St. John's College, a Bastion of the West, Makes Room for the Classics of the East," *The Chronicle of Higher Education*. Vol. 45, Iss. 37, May 21, 1999, p. B2.
- ⁵⁸ Eva Brann, "Current Questions about the St. John's College Book List," p. 8.
- ⁵⁹ ルールは、西洋中心主義的なセント・ジョーンズ・カレッジのグレイト・ブックス・プログラムについて「好むと好まざるとにかかわらず、この排他性が、プログラムの生き残りに対して貢献した要因でもあったのかもしれない」と指摘している。William Scott Rule, "Seventy Years of Changing Great Books at St. John's College," p. 154. なお江藤裕之は、セント・ジョーンズ・カレッジのアナポリス校のセミナーの様子などを体験報告し、また同カレッジのカリキュラムを紹介するとともに、日本におけるグレイト・ブックス・プログラムの有効性と導入するにあたっての課題について検討している。江藤裕之「第9章 グレート・ブックス・カレッジの実際——セント・ジョーンズ・カレッジ体験報告」松田義幸ほか著『グレート・ブックスとの対話——「学習社会」の理想に向けて』財団法人かながわ学術研究交流財団、1999年、139-176頁。